



TITLE:

# <大會抄録>漢代の墳墓祭祀畫像における門闕像と亭長像

AUTHOR(S):

佐竹, 靖彦

---

CITATION:

佐竹, 靖彦. <大會抄録>漢代の墳墓祭祀畫像における門闕像と亭長像. 東洋史研究 2000, 59(3): 503-504

ISSUE DATE:

2000-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155345>

RIGHT:

いう重要な役割をも擔っていた。

## 近代の宗譜から見た宗族の軌跡

——廣東の冼氏を對象として——

井 上 徹

宋代に開始されたところの、官界と永續的な關係を保つような名門の家系を樹立する裝置としての宗族集團を形成しようとする動きは、一六世紀以降、華中・華南の都市を中心として發展を遂げ、地域社會に定着していった。宗族は、その普及のプロセスにおいて、宗族結合の核心をなす父系血統の觀念と祖先祭祀の浸透とともに、人々の生産と生活を防衛する相互扶助團體としての性格を加え、その存在自體が廣義化した。宗族が最もその威力を發揮したのは、「西洋の衝擊」に直面した一九世紀半ば以降の近代化の過程においてである。本発表の眼目は、中國で最も早くに近代化に直面した廣東の冼氏が編んだ宗譜の分析を通して、近代化に對する宗族の對應を検討することにある。

冼氏の一族は廣州・肇慶兩府に廣く分派していたが、各地の冼氏は、明代後半以降、それぞれの血縁關係を強めるとともに、明末清初には、兩府の冼氏を大統合する事業を廣州城で舉行した。この大統合に至る冼氏諸房の浮上の軌跡と宗族の普及の潮流との關係、また清代における諸房と大統合との關係を検討することが第一の課題である。第二に、近代化への對應である。アヘン戦争の前後から、

傳統的な産業・流通構造の變質にともなう失業者の増大、農業經營の不振、會黨の活動の活潑化など、秩序不安が飛躍的に増大した。こうした秩序不安に對して、冼氏は各地の諸房内部における宗族結合と大統合の強化によって、族人の生産と生活を保全しようとした。その間の事情を探ることによって、近代化と宗族との關係を考察したい。

## 漢代の墳墓祭祀畫像における門闕像と亭長像

佐 竹 靖 彦

漢代の畫像石、畫像磚、墓室壁畫には多くの亭長の像あるいは亭長の像と想像されている像が含まれており、門闕とりわけ雙闕の傍に立つ主として啓戟等をもつ武官の像をそれにあてる聞有氏の説、門闕とその門衛の像を西王母の世界の入口を示すとする曾布川氏の説、漢代の都亭は「國立の旅館、つまり旅行中の臨時の宿泊所であり」、祠堂畫像に見える都亭は、墓主が地下の墓室から車馬にのり現世に來た時の臨時の宿泊所であるとする信立祥氏の説が並立している。問題が墳墓祭祀畫像の理解にかかわる以上、その畫像學的理理解が最重要であるのは論を待たないが、本論では畫像による祭祀がより大きな祭祀の體系の一部であるとして、石棺、石槨、墓室、石闕、石造祠堂、あるいは現在はずでに失われてしまった大規模な木造宗廟、木造寢殿等に描かれていたはずの畫像を墳墓祭祀畫像の概念によって總體的に認識することにより、この問題の解決に迫ろう

とするものである。

結論的には、前漢初期までの、鳥、樹、璧玉等の史前期にまでさかのぼる永生の憑り代を媒介とする垂直の昇天あるいは昇仙の概念が、前漢中期ごろに門闕を天門と假想することによる水平の仙界進入の概念に變化したが、この變化を引き起こした要因は現實の亭樓の境界性のイメージであり、國家の認可を経て墓園の前に建てられる石闕がこの亭樓の境界性のイメージを墳墓祭祀のなかに定着させたのであると考える。